中印関係：1954－1962年

ローレンツ・リューティ
（マギル大学）

半世紀前、中印関係はわずか5年の間に友好関係から敵対関係へと転じた。1954年6月、両国は平和共存5原則（パンチシーラ）に合意した。その62カ月後、ヒマラヤ山脈の未確定国境を挟んで、両国は互いに発砲を開始していた。ジャワハラール・ネルー首相と周恩来首相による協議の中で互いの違いを詰めようという努力は、1960年4月に不首尾に終わった。中印友好関係の破綻はチベットでの様々な出来事と関係していた。中国本土とインドに挟まれた地域が意見の相違の大半を生んだ源であり、未確定の国境線が1959年と1962年の戦争の原因となった。ではこのような展開はいかにして生じたのだろうか。

数多くの同時代の観測筋と後代の歴史家がその道筋をたどろうとしてきた。どちらの側の支持者たちも自国の印象の方を良くしようと試みてきた。公文書記録はまだ不完全かもしれないが、中印およびその他の諸国にある文書は、実際の出来事をいくらかでも明らかにする役に立つ。中印関係を悩ませた諸問題は、1954年から1959年初頭の期間にかけて蓄積していったものである。1959年の晩冬から初春に起きたチベット蜂起が状況を悪化させた。中国支配下のチベットとインドの国境地帯における相互の軍隊の配備は、一連の展開から必然的に生じたことではあるが、1959年の晩夏になってインドと中国の間で武力衝突を引き起こす結果となった。その年の秋から翌年の春までの間に、両国はそれぞれの境界線を公に画定し、領土権の主張を明らかにして交渉を見据えた。最終的には1960年4月までに周恩来がデリーに赴き、ネルーとの会談で解決策を探ろうとしたのである。

1962年に軍事衝突を開始したのは中華人民共和国であるが、国際関係において予期せぬマイナスの影響を受ける矢面に立ったのはインドだった。従って長期的に見れば、中印国境紛争は係争中の領土をめぐる衝突であっただけではなく、アジア・アフリカ非同盟運動の主導権を巡る争いでもあった。中印友好関係の崩壊は、インドが第三世界における指導者の地位から転落することと平行して起きたが、それはおそらくは転落の原因でもあった。皮肉にも、1955年に中国をその世界に引き入れることを主張したのはネルー自身であった。その10年後、中華人民共和国は反ソ、反インド政策を擁して、運動で優位を占めようとした。しかし結局、中国政府は見事に失敗したばかりではなく、その過程においてアジア・アフリカ非同盟運動に終止符を打ってしまったのである。

事実の流れを評価するための記録文書の基盤はまだ限られている。インド、中国、旧ソビエトおよび旧東ドイツが保有する記録文書は、いくつかの側面を解明するのに有用である。